

2016 年度 東北大学 前期 国語

一 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	30分	藤田省三『全体主義の時代経験』（初版1995年）からの出題。藤田省三は昭和・平成期の思想史家・政治学者で、代表作に『天皇帝国家の支配原理』『精神史的考察』などがある。丸山真男に師事し、戦後の日本思想に対して独自の精神史的・文明的考察を行った。入試頻出の著者であり、この『全体主義の時代経験』からもよく出題されている。	少ない文字数で複数の話題が簡潔にまとめられている密度の高い文章ではあるが、論理構造は明快で文章の展開を理解するのは容易であったろう。例年通り少ない文字でまとめる問題が出題されており、的確に要点を把握する力が求められた。また、「市場経済」や「資本主義」は評論において頻出のテーマであり、その背景について理解しておけばスムーズに文章を読解することができただろう。 問(二)では実質的には第一段落の要約が求められており、厳しい字数制限の中で表現を丹念に推敲する必要がある。問(三)は要点を把握できさえすればすんなり解答できた

傾向と対策
<p>だろう。問(四)は周辺の段落を一つの意味段落として捉えたうえで、その内容を要約することが求められた。意味段落の流れを把握し、字数制限に従って文中の言葉をうまく言い換える力が試された。問(五)はほかの設問と比べて字数制限がそれほど厳しくなく、多くの内容を解答に盛り込めると思うが、最終段落の解釈が難しかったため、書くべき内容を絞るのに苦労したのではないだろうか。結果として制限字数内でまとめるのが最も難しい問題であったかもしれない。解答字数が長くても、問われているのは的確に要点を把握する力である。</p> <p>決められた文字数で要点を簡潔に解答することが求められる大学なので、日頃の練習がものをいう。模範解答などを参考に、自分が解答で使える表現の幅を広げることを意識して過去問演習を重ねていってほしい。</p>

解答

問(一) (1) 便宜的 (2) 交渉 (3) 潰 (4) 突破 (5) 付随物

問(二) 市場経済の支配で売買対象にもなった貨幣の価格変動の経済全体への強制力。(35字)

問(三) 「自然」はそのままの形では商品として売買不可能だということ。(30字)

問(四) 「労働力」範疇の創出において、現実には一体として商品たり得る「労働力」と「労働をする人間」を切り離してしまっているから。(60字)

問⑤ 擬制商品中心に絶え間なく売買が進行するなか、人間もまた商品化

され、擬制商品の存在と機能の分離、対象と性格の絶えざる変転といった現象に巻き込まれている。(75字)

本文解説

段落解説

I 「擬制商品」としての貨幣(第1段落)

近年「円高」や「円安」といったものは日常生活と密接な関係をもつようになり、日本人は円の値段の変動に否応なく影響を受けているが、これを筆者は不思議なことだとして指摘する。市場経済の支配が強まるにつれ、本来は物の売買を成立させるための媒介手段であったはずの貨幣自体が商品と なっていったからだ。このように、本来売買を目的としていなかったものが商品となったものを、カール・ポランニーは「擬制商品」といった。「擬制商品」である貨幣は、「市場経済」活動全体を媒介する記号物であるため、その売買価格の変動は経済全体に影響をもつ。筆者によると、西欧に遅れて「資本主義」が導入された日本の経済はより強くその影響を受けており、円の価格の変動は現在大衆全員を束縛するものになっているという。

II 「擬制商品」としての土地(第2段落)

土地もまた、元来売買目的のために造られたのではない「擬制商品」の一つだ。もともと「土地」は「自然」の中心の一部である。「市場経済」の支配が強まることで「自然」は商品化され人間社会とかわるようになるが、「自然」はそのままの形では商品たり得ない。そのため、「市場経済」が成立し発展するうえで「自然」をも商品化するためには、「自然」を自然のまま

でそれに依存して生計を立てる「自然経済」は取り潰されなければならない。このことをローザ・ルクセンブルグは「資本主義」の本質として鋭く指摘した。筆者はローザの論点を、今日、「土地」が「市場経済」において強大な支配力をもつ三大擬制商品の一つになっていることを見越した認識であるとして高く評価している。

III 「擬制商品」としての労働力(第3〜第6段落)

三つ目の「擬制商品」は「労働」である。マルクスは「労働一般」と「労働力」を範疇的に区別した。労働市場で売買されるのは「労働そのもの」ではなく「労働力」であり、人は独立自由な一人の人格としてそれを販売する。結果、堂々たる労働運動が可能となり、「階級闘争」の在り方も変わってくることになる。しかし、この「労働」から「労働力」を抽出し一つの基礎的な社会範疇に仕上げた、まさに天才といえるマルクスの範疇創出には、非難の余地があると筆者は考える。現実には「労働をする人間」は「労働力の発現としての労働」を行うために、「労働力」と切り離すことはできないからだ。結局のところ、「労働力」を売る際には人間を売ることになる。「労働者」は自分のもつ「労働力」の付随物として「労働力」に依存しなければならぬため、その販売主体であり得ない。これでは人間疎外の問題が起こるの当然であると筆者は考える。

IV 今日の「市場経済」(第7段落)

今日の「市場経済」は、本来売買の対象ではなかった貨幣、土地、「労働力」を生む人間といったものが中心となっており、その存在と機能は分離されているという。「擬制商品」としての機能が重視される時、その本来の在り方は無視されるということだ。また絶え間なく進行する売買によって、

「擬制商品」の対象と性格は絶えず変転していると筆者は考えている。これは貨幣の性格は「ドル」からたちまち「円」へと変転し、その対象は「パン」から「パチンコ」になるといったようなことを指す。消費物も消費者も無数に近い場合には、ひたすら無限の変転だけが実在する。貨幣の売買、労働力の吸収・放出、土地の売買は、この終わりのない無限の変転の方向を少しでも変化させようとするものであったという。それだけ「擬制商品」は市場経済に対して強い支配力をもっていたということだ。そしてその背後には売買不可能な地球的自然の有限な諸性格や、いろいろな存在諸形式が静かに応答を待っているのだと筆者はいう。市場経済の変転無窮動に対し、いつか売買不可能な地球的自然の性格が限界を突きつけ、社会・人間・経済といった存在形式もまた何らかの答えを出すということだろうか。この問題において引用されている部分の内容だけでは、この最終段落の最後の部分が意味するところを正確に理解するのは難しい。確かにいえるのは、「元来商品でないもの」を売買し続けた果てには、「売買不可能なもの・商品化できないもの」が待ち受けているということである。絶え間なく進行する売買は、「売買できないもの」によって終わりを迎えるのではないだろうか。

百字要旨

擬制商品が人間に対し強い影響力をもつ現代の市場経済で、人間もまた商品化され存在と機能は分離し、絶え間なく進行する売買によって対象も性格も変転し続けており、いつか売買不可能なものがこれに応答するだろう。

(100字)

用語解説

―出典：『広辞苑 第六版』（岩波書店）（ただし、※のついた語義は解説執筆による）

円高 為替相場で、相手の外貨に対する日本の円の価値が高い場合をいう。

例えば1ドルが90円は、1ドルが100円に比して円高。↓円安

否応無しに 相手の意向には関係なく。有無を言わずに。

市場経済 財・サービスの生産・消費が市場機構によって社会的に調節される経済制度。（※注：市場機構とは、自由に売買ができる市場において、需要と供給の変化に応じて価格が変動し、その価格の変化

が翻って需要と供給のバランスを調整することによって、資源が最適分配される仕組みのことをいう。）

便宜的 便宜を中心に決めるさま。間に合わせに行うさま。

記号 一定の事柄を指し示すために用いる知覚の対象物。言語・文字などがその代表的なもので、交通信号のようなものから高度の象徴まで含まれる。また、文字に対して特に符号類をいう。

資本主義 封建制下に現れ、産業革命によって確立した生産様式。商品生産が支配的な生産形態となっており、生産手段を所有する資本家階級が、自己の労働力以外に売るものをもたない労働者階級から労働力を商品として買い、それを使用して生産した剰余価値を利潤として手に入れる経済体制。

制縛 制限を加えて自由を束縛すること。

抽象 事物または表象の或る側面・性質を抜き離して把握する心的作用。その際おのずから他の側面・性質を排除する作用を伴うが、これを捨象という。一般概念は多数の事物・表象間の共通の側面・性質を抽象して構成される。

範疇 ※①多義的な存在の基本構造を表す観念。（哲学用語）

②同じ種類のもの所属する部類・部門の意。

主体 ①元来は、根底に在るもの、基体の意。

⑦性質・状態・作用の主。赤色をもつ椿の花、語る働きをなす人間など。

①主観と同意味で、認識し、行為し、評価する我を指すが、主観を主として認識主観の意味に用いる傾向があるので、個性・実践性・身体性を強調するために、この訳語を用いるに至った。

↓客体

②集合体の主要な構成部分。

市民社会 特権や身分的支配・隷属関係を廃し、自由・平等な個人によって構成される近代社会。啓蒙思想から生まれた概念。

国民国家 主として国民の単位にまとめられた民族を基礎として、近代、特に18～19世紀のヨーロッパに典型的に成立した統一国家。国民の一体性の自覚の上に確立。民族国家。

凡庸 すぐれたところのないこと。なみなみ。平凡。また、その人。凡人。

観念論 物質に対して観念的なものの側に根源性を置く哲学説。

断り書き 本文についての説明・補足・例外などを書き記した文章。ただし書き。

疎外 ①うとんじ、よそよそしくすること。

②ヘーゲルでは、精神が自己を否定して、自己にとってよそよそしい他者になること。マルクスはこれを継承して、人間が自己の作りだしたもの（生産物・制度など）によって支配される状況、さらに資本主義社会において人間関係が主として利害打算の関係と化し、人間性を喪失しつつある状況を表す語として用いた。

無窮 どこまでも続いてきわまりのないこと。無限。

全体主義 個人に対する全体（国家・民族）の絶対的優位の主張のもとに諸集団を一元的に組み替え、諸個人を全体の目標に総動員する思想

および体制。

設問解説

問(一)

解答 (1) 便宜的 (2) 交渉 (3) 潰 (4) 突破 (5) 付随物

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

(2)(3)(4)は日常的によく見る漢字で平易であるが、(1)(5)の漢字については実際に書いたことがない人もいただろう。読めても書けない漢字は意外と多い。実際に書ける必要はないセンター試験の漢字を勉強するようなときも、書けるようになるまで練習しておくとうい。

問(二)

解答 市場経済の支配で売買対象にもなった貨幣の価格変動の経済全体への強制力。(35字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 指示語説明型+理由補填型

解答範囲 I (第1段落)

解説

まず、傍線部が「其の現象」と指示語を含んでいるので、これが具体的に何を指し示すのかを考える。指示語で表されているものは傍線部より前の部分に説明されているはずである。そこで、この指示内容を明らかにするために相同表現を求めて本文を遡行していく。すると、これは10文目の「その現

象」と同内容であり、さらにその前文へ遡行すると、「その『商品』の売買価格の変動は、『市場経済』活動全体の媒介記号の変動であるだけに経済全体への実質的な影響力（権力）をもつ」という箇所突き当たる。傍線部の「強い制縛力」という表現はこの「実質的な影響力（権力）」と非常に類似した表現である。第1段落中にはこの箇所以外に「力」と呼べるようなものは存在しないことから、「強い制縛力」と「実質的な影響力（権力）」は同内容だと考えられる。となると、「其の現象」と「その『商品』の売買価格の変動」は同内容である可能性が高い。

これらの仮説は第1段落全体の文脈にまったく矛盾せず、整合する。第1段落を概観してみると、日本人は全員もれなく、「円という貨幣の価格変動によって様々な影響を否応なく受けて暮らしている」ことが話題として取り上げられている。次に、筆者は「貨幣」のもつ性質について議論しつつ、なぜ「貨幣の価格変動」が経済全体に影響をもつのか説明する。そして、現代の日本における経済の動向について説明したうえで、私たちは「其の現象」の「強い制縛力」から逃れられないと語る。この第1段落の流れを考えれば、傍線部の「其の現象」とは『商品』の価格変動」のことであり、「強い制縛力」は「実質的な影響力（権力）」と同内容だとわかる。つまり、「その『商品』の売買価格の変動は、『市場経済』活動全体の媒介記号の変動であるだけに経済全体への実質的な強制的な影響力（権力）をもつ」という箇所は傍線部の相同表現だったのだ。そして、「貨幣」それ自体までが売買の対象物すなわち『商品』とされる（第1段落9文目）とあることから、「ここでいう『商品』とは貨幣のことであるとわかる。つまり、傍線部の内容は「貨幣自体の売買価格の変動という現象のもつ経済全体への実質的な強制的な影響力」といったものである。

ただ、本来貨幣とは「物の売買を成り立たせるための媒介手段として造ら

れたもの」であり、それがなぜ「商品」として売買されるものになったのか、またなぜ貨幣の売買価格が経済全体に実質的強制的影響を及ぼすのか、という二点が疑問として当然浮かぶ。後者の疑問については先ほど傍線部の相同表現になっていると指摘した箇所である程度説明がなされていることに関心がたろう。つまり、貨幣とは物の売買を成立させるための媒介手段であり、その貨幣の売買価格の変動は、『市場経済』活動全体の媒介記号の変動である」からだ。前者の疑問については、第1段落7文目から、「市場経済が全面的に支配」したために「市場の形成と維持の手段」たる貨幣もまた「商品」＝「売買の目的物」になったのだとわかる。

ちなみに、第1段落10文目「一般大衆全員がその現象のなかに巻き込まれたのはせいぜい近々二十年ばかりの間のことであった」とあるが、この本の初版が出版されたのは1995年であり、その二十年ほど前にあった、「その現象のなかに巻き込まれることになった出来事とは、1973年のブレトン・ウッズ体制の崩壊、すなわち変動相場制への移行である。このようなことは注釈で説明されていないことからわかるように、現代文を解くうえでも前提とされるような一般的な教養である。知らなかった人は日本史や政治経済の教科書などを読んで頭に入れておこう」。

以上のような二つの疑問が浮かぶのは傍線部単体では論理的に飛躍しているためであり、字数が許すかぎりこの飛躍を埋めたいところだが、貨幣が売買を成立させる媒介手段であることは自明ともいえるので、優先順位としては前者の疑問は後者の疑問に勝る。そこで本解答ではこの点につき省略した。

したがって、解答は「市場経済の支配で売買対象にもなった貨幣の価格変動の経済全体への強制力。」となる。

《解答要素》

- ① 「市場経済の支配」
- ② 「(①によって) (売買活動の媒介手段だけでなく) 売買対象にもなった貨幣」
- ③ 「貨幣 (円も可) の価格変動」
- ④ 「経済全体への強制力」

《参照箇所》

- ① 第1段落7文目
- ② 第1段落7・9文目
- ③ 第1段落9文目
- ④ 第1段落9文目

問(三)

解答 「自然」はそのままの形では商品として売買不可能だということ。

(30字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 具体化型

解答範囲 II (第2段落)

解説

傍線部の次の文に、「市場経済」の成立や発展のためには「自然」を自然のままに扱う「自然経済」は取り潰されなければならないと書かれている。この行為は「自然」が「自動的な商品ではない」から必要なものであり、自然を商品にするために行われる。つまり、「自然」を商品にするためには、「自然」を自然のままに扱うことをやめなければならないということだ。自然のままの状態から、商品にするために何らかの行程を経る必要があるの

ある。これが、「自動的な商品ではない」はないという言葉の意味するところである。

具体的にどういった行程を経るのかは本文に書かれていない。したがってここからは解答には必要のないことだが、「良かれ悪しかれ」、「自然経済」が「取り潰される」といった表現から、「自然」を商品にするために必要な行程とは人間による自然の開拓や開発のことであろうと考えられる。

以上から解答は、「『自然』はそのままの形では商品として売買不可能だということ。」となる。

《解答要素》

- ① 「自然のままの形で売買することはできないということ」

《参照箇所》

- ① 第2段落6文目

問(四)

解答 「労働力」範疇の創出において、現実には一体として商品たり得る「労働力」と「労働をする人間」を切り離してしまっているから。(60字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 III (第3、第6段落)

解説

まず傍線部の直前を見ると、「その範疇創出を見て」とあるので、ここで「非難したかもしれない」といっているのは、「その範疇創出」のことである。「その範疇創出」というのは、前文の「この『労働力』という見えないものを引き出し一個の基礎的な社会的範疇にまで仕上げたのは、天才マルクスの

理論力を示すものであった」という内容を受けていることから、「マルクスによる『労働力』範疇の創出」のことだとわかる。また傍線部は『『観念論的』として非難したかもしれない』となっているので、「マルクスによる『労働力』範疇の創出」が非難され得る理由は、「観念論的」であるからだとなる。

では、「観念論的」とはどういうことだろうか。「観念論」については倫理で習った人もいるかもしれないが、これを理解している受験生は少ないだろう。とはいえ、傍線部のあとに続く段落の内容を読めば、傍線部における「観念論的」の意味するところは推測できる。第5・第6段落では、現実には「労働する人間」と「労働力」は独立に存在するものではないため「労働力」だけ売るといふようなことはできず、「労働力」範疇の創出は実際社会では多くの場合役に立たないということが語られている。このことから、「マルクスによる『労働力』範疇の創出」が「観念論的」として非難され得るのは、それが現実には一体として商品たり得る「労働力」と「労働をする人間」とを切り離しており、実際社会では役に立たないからではないかと推測できる。

一応付け加えておくと、「観念論」は「物質に対して観念的なものの根源性を主張する立場」のことである。「マルクスによる『労働力』範疇の創出」において「観念論的」なのは、現実には「労働をする人間」と独立して存在しない「労働力」という実体のない「観念」にすぎないものを「労働」の根源として抽出している点である。これにより、「労働をする人間」と「労働力」が理論上では分離してしまっている。筆者はこの点において「マルクスによる『労働力』範疇の創出」は非難され得るといっており、これは先ほどの推測の内容と一致している。

したがって解答は、「労働力」範疇の創出において、現実には一体として商品たり得る「労働力」と「労働をする人間」を切り離してしまっているか

ら。」となる。

《解答要素》

- ① 『労働力』範疇を創出する・『労働力』概念を抽出する
- ② ①において、『労働力』と『労働をする人間』を切り離してしまっている
- ③ 「現実には、『労働力』は『労働をする人間』から独立した商品として存在し得ない。」

《参照箇所》

- ① 第4段落1・2文目
- ② 第5段落1・2文目
- ③ 第5段落3文目

問(五)

解答 擬制商品中心に絶え間なく売買が進行するなか、人間もまた商品化され、擬制商品の存在と機能の分離、対象と性格の絶えざる変転といった現象に巻き込まれている。(75字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 本文全体

解説

まず、第7段落までの部分における人間についての言及をまとめる。(Ⅰ)では、貨幣の価値の変動という擬制商品の動きが、人間の生活に強い影響力をもっていることが示された。(Ⅱ)では、土地もまた「擬制商品」として「市場経済」のなかで強大な支配力をもっていることが語られた。(Ⅲ)では、

「労働力」という擬制商品について考えたとき、結局のところ「労働力」を生む人間自体が売買されているという現実が語られた。ここまでの部分で語られたことをまとめると、擬制商品が人間に影響力をもつだけでなく、本来商品ではない人間自身もまた売買されるようになっていくということである。

これを踏まえて第7段落を見ていく。今日の『市場経済』では、本来商品ではない貨幣、土地、人間といった「擬制商品」が中心となっている。第1段落で語られたように、「擬制商品」は人間に対して強い影響力をもっている。そして、絶え間なく進行する売買のなか、これら「擬制商品」の「存在」と「機能」は分離され、対象も性格も変転し続けているという。

「存在」と「機能」が分離されているというのは、本来売買を目的としていない存在が「擬制商品」として扱われるなかで、「擬制商品」としての「機能」が重視され、その本来の在り方が無視されているというような意味だろう。人間が商品として扱われることで人間性の喪失という「疎外」問題が引き起こされるといふ第6段落の話はまさに、人間の「存在」と「機能」の分離の問題である。

では、「対象」も「性格」も変転し続けているというのはどうということだろうか。本文中の具体例に従うと、アメリカの通貨である「ドル」が、一時間後には日本の通貨である「円」になるというのは「性格」の変転であり、その用途が「パン」の購入から「パチンコ」の料金になるとするのは「対象」の変転であるということだ。そしてこうした現象は、無数の消費者による、無数の消費物の絶え間ない売買によって起こり続けている。そのため「何が何に相当するか、などの予測は無意味」なのである。パン一個に相当するドルは、たちまちパチンコ一回に相当する円になってしまふのだから。

ここで重要なのは、「労働力」を生む人間もまた本来商品として生まれた

わけではないが、それ自体が売買の対象となっていることだ。つまり、人間もまたある種の「擬制商品」としてこの変転無窮動のなかに巻き込まれているのである。

最終段落は売買不可能な地球的自然の諸性格や、存在諸形式に触れて終わるが、本文を通して語られた今日の「市場経済」と、そのなかに生きる人間とはひとまず関係のない話なので、解答に含める必要はない。

以上から解答は、「擬制商品中心に絶え間なく売買が進行するなか、人間もまた商品化され、擬制商品の存在と機能の分離、対象と性格の絶えざる変転といった現象に巻き込まれている。」となる。

《解答要素》

- ① 今日の市場経済Ⅱ「擬制商品中心に絶え間なく売買が進行する」
- ② 「労働力」を生む人間もまた商品となっている」
- ③ (人間は)「擬制商品の存在と機能の分離、対象と性格の絶えざる変転」といった現象に巻き込まれている」

《参照箇所》

- ① 第7段落1・2文目
- ② 第6段落1文目
- ③ 第7段落2文目

(正木僚、丸岡賢人、井小路馨)

2016 年度 東北大学 前期 国語

二 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★☆☆☆	30分	宮下奈都『終わらない歌』からの出題。宮下奈都は日本の小説家で、上智大学文学部を卒業し、2004年『静かな雨』で文学界新人賞佳作に入选し小説家デビュー。2016年『羊と鋼の森』で第13回本屋大賞を受賞した。高校入試では頻出の作家であるが、大学入試で出題されることはまれである。	発表されてから日の浅い作品で、現代人にとってなじみのある言葉で書かれているためかなり読みやすかったことだろう。また文章の構成も非常に明快で登場人物も少なく、出来事を境に変化する登場人物の心情をしっかりと追うことさえできれば、大きく外れた解答を書くことはなかったはずだ。 問(一)は、東北大学の大問二では頻出の、語句の意味を説明させる問題であった。読書量の少ない人にとっては初めて見るような語の説明をしなければならぬこともある問題であるが、2016年度はそのような難解な語はないと思

傾向と対策
われ、標準的な難易度であった。辞書的な意味をそのまま覚え、一字一句たがわず書けるようになるのは不可能なので、文脈から意味を読み取り、品詞に注意しながら答える練習をしておくべきである。知らない言葉と出会ったら、スマホを手に取る前に語句説明の問題の練習だと思って意味を推測してみよう。問(二)・(三)はいずれも短い字数でまとめる問題であるが、第一に答えるべき内容はわかりやすく、字数に合わせてそこに何を加えていくべきかを考える必要がある。問(四)と問(五)は異なる設問ではあるが、問(四)は問(五)で答えることになる「心情の変化」を生んだ「出来事」の要約で、問(五)はその「出来事」の前後における「心情の変化」を追う設問であり、表裏一体の関係にあった。どちらの設問においても、出来事・事件があつて心情が変化するという小説の基本を意識していれば、要点をおさえた解答が書けるだろう。 東北大の国語の大問二は小説であることが多いが、本問のようなごく最近に書かれた現代の文章から、戦前の文章に至るまで幅広い時代・ジャンルから出題されている。旧帝大の中でこのように小説がコンスタントに出題されているのは東北大と大阪大(文学部)だけであり、記述式問題の対策は、ついつい出題数の多い評論に偏ってしまいがちなので、この東北大大問二については多めに年度をさかのぼって過去問演習をしておくとういだろう。

解答

問(一) (1) 無駄がなく、あっさりとしているさま。

(2) 本来の目的と取るに足らないことを取り違えること。

(3) 一つ一つのこまかな動作。

問(二) 自分より努力していないかもしれない母親たちのために働くことに

納得しきれないから。(40字)

問(三) 努力していない人が努力した人の出した結果だけをほめる、悔しさ

の感じられない言葉。(40字)

問(四) 舞台の後ろの一人だった千夏が長所である歌を磨き、観客を

魅了し存在感を放つ役者へ成長した姿を目にして圧倒されたこと。

(60字)

問(五) 欠点も含めた自分の多様な側面を、長所がより輝くために必要なも

のとして受け入れ、自分の可能性を信じ長所を磨いていこうと決意

する前向きな気持ち。(70字)

本文解説

段落解説

I ひかりの愚痴(第1文)「さ、そろそろ行くっか」

保育園に実習に行ったひかりは、そこで感じたことを早希に話し始める。

最初はひかりの言わんとすることがわからなかった早希であったが、おおかさんたちに対して「相手も、こつちをあんまり信用してないんじゃないかって。」と語るひかりに、ひかりらしくない方向に屈折してしまいそうな危うさを感じて話を止めようとする。しかし、ひかりが淡々と語るのを聞いてひかりが話したがつていることを悟り、話を聞くことにした。小さい頃から優

秀だといわれてきたというひかりは、子育ての経験がない自分がおかさんに信用されないのは当たり前だが、自分もまたおかさんを信用していないことは問題であると話す。自分より働きのよくないおかさんがいたらと働くために赤ちゃんを預かることに対する違和感がどうしてもぬぐえないのだという。ひかりのように優秀ではない早希も、がんばらない人をサポートすることに違和感をもっていた。がんばれ、といわれて育った早希は、努力しない人のもつ甘さを嫌悪している。そういう人が贈る、自分にはできなかったことを達成した人への屈託のないほめ言葉を、不気味だとさえ感じていた。

早希は、どこから来るかもわからない自尊心によってがんばれない人を見下し、自分の駄目さを受け入れられず、自分の中の可能性を引き出そうとして軋轢を生んできた。そんな自分とは違うと思っていたひかりも、自分と同じく自意識を持って余したようなみっともない気持ちになることがあると知り、どうすればいいかわからないものの、もう少しこの気持ちと格闘していようと思う早希であった。しかし、ひかりへの返答として口から出たのは毒にも薬にもならない凡庸な台詞だった。「いろいろあるよね」と言った早希に対し、ひかりは小さく笑ってうなずき、「うん、いろいろあるね」とだけ答えると、いつもの明るい声に戻った。

II 千夏の歌(「これから、この近くの公演があるのだ。」「もしも口をくかったらどう。」)

二人は、同級生だった原千夏が出演しているミュージカル公演に向かった。千夏はたいがい舞台の後ろで踊っている一団の中にいたのだが、千夏からの案内のながきによると今回は独唱する場面があるという。劇場の入り口でチケットを切ってもらったときには、ひかりはすっかりいつもの笑顔に戻って

て、早希はひとり置いていかれたように感じた。舞台が開演すると、ミュージカルのことを苦手とさえ感じている早希にもわかるほどの存在感を放つ主演の女優を見て、「ああ、こういう人がやっぱり主役なんだな」と早希は思った。後ろで踊っている中には千夏がいて、がんばっている姿をほほえましく見守っていた。しかし、だんだん千夏の独唱のシーンが入るにつれ、早希は千夏の姿に魅了されていく。早希だけでなく、ひかりを含め会場全体が千夏の一挙手一投足に視線を送っているように感じられ、クライマックスの前に千夏が死んだときには、理解が追いつかないほどに千夏の演技に引き込まれていた。「どうして、あの子が、いつのまに」。千夏は素人の早希にもはっきりとわかるほど特別に輝く役者へと成長していた。千夏の声と身体を通して現れた何かに対し、早希はただただすごいと思うしかなかった。それは隣にいるひかりも同じで、幕が下りてからも余韻からしばらくの間動けなかった二人であったが、お互いひとことも口をきかずに劇場の外へ出た。

Ⅲ スライダーズ・ミックス（「駅までの道をふたりで黙って歩いた。」）最

終文

劇場をあとにして駅までの道歩く二人は、もう千夏の舞台を見る前の愚痴をこぼすだけの二人ではなかった。駅で別れるとき、早希は「スライダーズ・ミックス」という言葉を口にする。スライダーは野球における決め球であるが、ストライクに入らないことも多いため、必ず他の球に交ぜて使う。「私たちはそれぞれ一球だけスライダーを持ってんだ」。そう教えてくれた千夏にとってのスライダーは歌であり、それはその人のもつ長所であり可能性である。そしてそれぞれのスライダーは、長所とはいえない他の球と交ぜて使うことでよりいっそう輝くのである。そう語る早希にひかりはうなずき、二人はお互いのスライダーを認めあった。スライダーを磨こう。二人のスラ

ライダーズ・ミックスのために。早希はそう強く胸に刻んだ。

百字要旨

自意識を持って余していた早希とひかりだったが、端役の一人にすぎなかった千夏が自らの長所である歌を磨き、特別に輝く役者へ成長していたのを見て、自分たちにしかない可能性を信じ、強みを磨いていこうと決意した。

(100字)

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

唐突 不意すぎて不自然なさま。だしぬけ。突然。

観念 ① あきらめること。覚悟。

② 思考の対象となる意識の内容・心的形象の総称。山の観念、善悪の観念など。ギリシア語の「イデア」に由来。

③ 物事に対する考え。見解。

屈託 ① 一つの事ばかり気にかかって心配すること。くよくよすること。

② 退屈や疲労などで精気を失っていること。

自尊心 自尊の気持。特に、自分の尊厳を意識・主張して、他人の干渉を受けないで品位を保とうとする心理・態度。プライド。

往生際 ① 死にぎわ。

② ぎりぎりのところまで追いつめられたとき。また、そのときの態度。

軋轢 あつれき (車輪のきしる意から) 人の仲が悪くなること。不和。

傲慢 おごり高ぶって人をあなどること。見くだして礼を欠くこと。

自意識 自分自身がどうであるか、どう思われているかについての意識。

愚痴 言っても仕方ないことを言っていて嘆くこと。また、その言葉。

凡庸 すぐれたところのないこと。なみなみ。平凡。また、その人。凡人。

走り書き 筆を走らせて文字を続けざまに書くこと。また、一息に急いで書いたもの。はやがき。

端役 演劇・映画などで、主要でない役。転じて、一般に主要でない役目。

また、その役をする人。

早鐘 火事などの緊急を知らせるために続けざまに激しく打ち鳴らす鐘。その鐘の音。また、緊張や不安で動悸が激しくなることのとたとえ。

スライダー 野球で、投手の投球の一種。投げた腕と逆の側にすべるように水平に曲がる変化球。カーブと違ってあまり落ちない。

設問解説

問(一)

解答 (1) 無駄がなく、あっさりとしているさま。

(2) 本来の目的と取るに足らないこととを取り違えること。

(3) 一つ一つのこまかな動作。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

辞書的な意味を知っていることが望ましいが、そうでない場合は文脈や漢字の意味から考える。もちろん、辞書的な意味を知っていても文脈は意識したほうがよい。以下に正確な意味を知らなかった場合の解答方法を述べる。

(1)これは文脈から意味を判断するのが難しいので、漢字の意味から連想する。

「淡」という漢字は、「冷淡」「淡泊」といったふうにも「あっさりしている」という意味をもつ。「淡々と」は形容動詞の連用形なので、説明の文末は「さま」「様子」などとする。

(2)文脈からも判断できる。保育士は、仕事などで日中忙しい親のために、子供を預かる仕事である。忙しくない、きちんと働いていないような親がいたらと働くために子供を預かっているわけではない。保育士の仕事には、「一生懸命働く親の手助けのため」という目的があるはずなのに、「だったら働く親のために子供の面倒をみる」というのは本来の目的と違ってきつまつ。また、本来の目的に対して、「だったら働く親のために子供の面倒をみる」とを考えたとき、これは「無益なこと、取るに足らないこと」であるというほかない。ここから「本末転倒」は「本来の目的と取るに足らないこととを取り違えること」であるとわかる。

(3)文脈からも漢字からも判断できる。「一挙手一投足」という漢字から、「手を挙げる」・「足を投げ出す」といった体の部位の動きを意味していることが推測できる。またこのとき早希は、「千夏の動きをよく見よう、千夏の歌をよく聴こう」という気持ちになっており、千夏の細かな動作にまで集中していることがわかる。これを合わせて考えると、「一挙手一投足」の意味は「一つ一つの細かな動作」であろうとわかる。

問(二)

解答 自分より努力していないかもしれない母親たちのために働くことに納得しきれないから。(40字)

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I

解説

ひかりの発言によると、ひかりは「頭では」「おかしい」とわかっているが、「きちんと働いているおかあさんの赤ちゃんを預かるのはいいけど、私も働きのよくないような人がいたら働くために子供を預かるなんて本末転倒じゃないか、って心のどこかで思っ」てしまうのだという。つまり、ひかりは自分と比較して努力していない人のために働くことに納得できないでいるのだとわかる。ここには「頭ではおかしいとわかっているのに、納得できない」という理性と感情の不一致があり、これが「もやもやする気持ち」を生んでいると考えられる。もし納得することができればこの不一致は解消されるため、自動的に「もやもやする気持ち」も消えるだろう。つまり「もやもやする気持ち」が「残る」のは、ひかりが「納得しきれない」からである。

もちろん、母親たちが努力しているのかどうかは知る由もないが、ひかりは「おかあさんを信用してない」と言っている。ひかりは、母親たちが自分よりも努力しているとは信じきれないからこそ、「私よりも働きのよくないような人がいたら働くために子供を預かるなんて」という言葉が出てくるのである。

以上から解答は、「自分より努力していないかもしれない母親たちのために働くことに納得しきれないから。」となる。

《解答要素》

- ① 「自分より努力していない人のために働くことに納得しきれない」
- ② 母親たちを信用できない＝「母親たちは自分より努力していないかもしれない」

《参照箇所》

- ① 「きちんと働いているおかあさんのく心のどこかで思っっちゃうんだ。」
- ② 「でもね、問題なのは私もおかあさんを信用していないところ。」

問(三)

解答 努力していない人が努力した人の出した結果だけをほめる、悔しさの感じられない言葉。(40字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I

解説

「屈託のないほめ言葉を聞くと、無神経な手で首筋を撫でられるような心地がした」とあるので、その感情は「屈託のないほめ言葉」に対するものであることは明らかであろう。したがって、「屈託のないほめ言葉」が具体的に何を示すのか説明すればよい。

ここで早希が取り上げている「ほめ言葉」は、「努力もしないうちから自分には何もできないと思っている人」から、称賛を受けるに値することを「積み重ねてきている」人に対して向けられたものだ。早希は、こういった努力していない人がほめ言葉を口にするとき、「どこにも引っかか」りを感じていないと考えている。

「引っかからない」というのは、「悔しいとは思わないのだろうか」という言葉から、努力した人の出した結果に対して悔しさを感じないことだとわかる。努力をしていない人は悔しいとも思っていないから、そんなに「簡単に」「屈託のない」称賛の言葉を口にするので早希は思っているのである。つまり、「屈託のないほめ言葉」とは悔しさが感じられない

いほめ言葉のことなのである。

また、努力していない人は、努力した人の「結果だけを簡単にほめる」という。ここには、ある成果を評価するとき、その成果を出すまでに積み重ねてきた努力を意識しないまま「結果だけ」をほめているという早希の非難が見受けられる。傍線部の「無神経な手で」というのは、このあたりをことをいっていると考えられる。したがって、「努力した人の出した結果だけをほめること」に対して非難の目を向けているように感じられる解答にするとなおよい。

以上から、「無神経な手で首筋を撫でられるような心地」は「屈託のないほめ言葉」に対するものであり、具体的には「努力していない人が努力した人の出した結果だけをほめる、悔しさの感じられない言葉」に対して感じているのだとわかる。これが最終的な解答にもなる。

《解答要素》

① 傍線部の感情の対象Ⅱ「屈託のないほめ言葉」Ⅱ「悔しさの感じられないほめ言葉」

② 「屈託のないほめ言葉」の主体Ⅱ「努力していない人」

③ 「屈託のないほめ言葉」の対象Ⅱ「努力した人が出した結果だけ」

《参照箇所》

① 「悔しいとは思わないのだろうか」首筋を撫でられるような心地がした。

② 「努力もしないうちから自分には引っかかりのなさが不気味だった。」

③ 「その結果だけを簡単にほめることができるのは、素直だからなのだろうか。」

問(四)

解答

舞台の後ろの一団の一人だった千夏が長所である歌を磨き、観客を魅了し存在感を放つ役者へ成長した姿を目にして圧倒されたこと。

(60字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅱ・Ⅲ

解説

心情の変化を生んだ出来事について答える問題なので、心情の変化を理解した上でその原因となる出来事をみていくとよい。

そこで、まず早希がどう変わったのか考える。「さっきまでの私とは違う私」でいう「さっきまで」とは「ここ(Ⅱ)さっき待ちあわせをした店」で愚痴をこぼしたときであり、それは千夏の舞台を見る前のことである。早希は他人を見下し、愚痴をこぼし、自分の駄目さを受け入れられずにいた。それが、千夏の舞台を見た後には自分の「スライダーを磨こう」と決意し、前に進もうとし始めている。このような早希の変化の過程と、「千夏が教えてくれた」「千夏のスライダーはずこかった」という早希の発言から、早希を変えた直接のきっかけは舞台における千夏の姿を見たことであるとわかる。解答では、「スライダーを磨こう」という決意を生んだ「千夏のスライダー」に注目し、早希が見た千夏の姿と、「千夏のスライダー」についてまとめればよい。

まず、早希が見た千夏の姿をまとめる。早希は今まで何度か案内をもらって千夏の舞台を見ており、千夏は「たいがい舞台の後ろで踊っている一団の中」にいた。舞台の序盤に「後ろで踊っている中」に千夏がいたうちは、早希は「ほほえましく見守って」いた。がんばっているのに自分は駄目だと

感じている早希は、「たいがい舞台の後ろ」にいる千夏に、自分の姿を重ねて見ていたのかもしれない。主役の女優の存在感には、「ああ、こういう人がやっぱり主役なんだな」というふうには、千夏と主役を比較して、越えられない才能の壁を感じているようでもある。ここまではまだ、早希は千夏のことを端役の一人としか思っていない。しかし、千夏の独唱のシーンが入るたびに、少しずつ千夏の歌と芝居に引き込まれていく。今まで舞台の後ろの一団の中の一人にすぎなかった千夏は、いつの間にか観客を魅了し存在感を放つ特別な存在になっていたのだ。したがって早希が見たのは、舞台の後ろの一団の一人ではなかった千夏が、いつの間にか観客を魅了し存在感を放つ役者へと成長していた姿である。

次に、千夏の「スライダー」について考える。「スライダー」というのは「決め球」であり、また「私たちはそれぞれ一球だけスライダーを持つてるんだ」とあることから、「スライダー」とはその人のもつ長所や強みの比喩であると考えられる。では、早希に「私たちはそれぞれ一球だけスライダーを持つてるんだ」と教えてくれた「千夏のスライダー」とはなんだろう。早希の感情が高まる契機となったのは千夏の独唱であったことや、「千夏は、すごい。千夏の歌は、すごい」といった表現から、「千夏のスライダー」は歌であると考えられる。千夏の大きな成長を目にしたときに、千夏が自分の「スライダー（＝長所・強み）」である歌を磨いてきたことを感じ取ったからこそ、早希の心の中に「スライダーを磨こう」という心情の変化が生まれたのである。

早希が駄目な自分と主役になれない千夏を重ねていたのだとすれば、「どうして、あの子が、いつのまに」という言葉からは、千夏に置き去りにされた早希の「焦り」を感じる人もいるかもしれない。しかし、「ただただすごいと思った」とあるように、心から湧き上がるのはあれほど嫌悪していた屈

託のない称賛であり、「焦り」や「悔しさ」といったネガティブな感情ではない。それほど早希は千夏の姿に圧倒されたのである。この「圧倒された」というニュアンスも解答に含められるとなおよいだろう。

以上から解答は、「舞台の後ろの一団の一人だった千夏が長所である歌を磨き、観客を魅了し存在感を放つ役者へと成長した姿を目にして圧倒された」となる。

《解答要素》

- ① 「舞台の後ろの一団の一人だった千夏が」
- ② 「千夏のスライダー」を磨き〃千夏の長所である歌を磨き
- ③ 「観客を魅了し存在感を放つ役者へと成長した姿を目にして圧倒された」

《参照箇所》

- ① 「これまでも何度か案内をもらって、舞台の後ろで踊っている一団の中にいた。」
- ② 「ほほえましく見守っていられたのは、特別に輝く役者であることははっきりわかった。」
- ③ 「ほほえましく見守っていられたのは、ただただすごいと思った。」

問五

解答

欠点も含めた自分の多様な側面を、長所がより輝くために必要なものとして受け入れ、自分の可能性を信じ長所を磨いていこうと決意する前向きな気持ち。(70字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 本文全体

解説

「本文全体の趣旨を踏まえて」とあるので、早希が「スライダーを磨こう」と思うようになるに至るまでの流れを考える。千夏の舞台の前後における早希の変化に注目してみてもよい。

千夏の舞台を見る前の早希は、「自分の駄目さ」を受け入れられず、がんばれない人を見下し、自分の可能性を引き出そうとして周囲との間に軋轢を生んでいた。また、ひかりの愚痴を聞いて、「自意識を持って余したようなみっともない気持ち」が自分のものだけではないと知り、「どうすればいいかわからないけど、格闘し続けようと思う。もう少しこの気持ちと格闘していよう」と思っていた。このことを踏まえて、千夏の舞台を見た後に「スライダーを磨こう」という言葉が出たのは、どのような心境の変化があったからなのか考えていく。

問(四)でも考えたが、スライダーというのはその人のもつ長所や強みの比喩であり、千夏にとつての歌である。しかし、早希は単に「長所を磨こう」と言っているのではない。ここで重要なのは、その前に「スライダーズ・ミックス」について語っている点である。「スライダー」は「一球じゃだめ」なのである。つまり、「スライダー」をいろんな球に交えて試合を乗りきるといふ例えは、長所とはいえない部分も含めた多様な側面が、長所が輝くためには必要であるということの意味するのである。このことを早希が語っているということは、早希は欠点も含めた多様な側面の大切さに気づき、「自分の駄目さ」をも受け入れようとしているのだとわかる。ここが、「自分の駄目さ」を受け入れられなかった今までの早希とは決定的に異なる点である。したがって、「長所が輝くためにも、欠点も含めた自分の多様な側面を受け入れよう」という気持ちだが、「スライダーを磨こう」という言葉の背後にあると考えられる。

早希のスライダーが何なのかはまだわからないが、「きつとすごい」はずなので、それを磨いていくためにはまず自らの可能性を信じなければならぬ。千夏の歌は、「私たちはそれぞれ一球だけスライダーを持つてるんだ」と信じさせてくれるものだったといえる。また、「スライダーを磨こう。その口にはできなかったけれど、口にするよりもっと強く胸に刻む」という発言からは、早希が「愚痴をこぼし」ていたときと変わって前向きな気持ちになっていることが読み取れる。これは、「スライダーを磨く」という、どうすればいいかわからなかった「自意識を持って余したようなみっともない気持ち」に対する一つの答えを見つけたからだ。このことから、「スライダーを磨こう」という言葉には、「自分の可能性を信じ長所を磨いていこう」と決意する前向きな気持ち」が込められているとわかる。

以上から解答は「欠点も含めた自分の多様な側面を、長所がより輝くために必要なものとして受け入れ、自分の可能性を信じ長所を磨いていこう」と決意する前向きな気持ち。」となる。

《解答要素》

- ① 「欠点も含めた自分の多様な側面を受け入れる」
- ② 「(①は、)長所がよりいっそう輝くために必要である」
- ③ 「スライダーを磨こう」 || 「自分の可能性を信じて長所を磨いてゆく決意」
- ④ (愚痴をこぼしていたときとは変わって) 「前向きな気持ち」

《参照箇所》

- ① 「スライダーって球く必ず他の球に交えて使うの」
- ② 「それでね、その球を合わせるの。そうしたらすごい試合ができる」
- ③ 「私たちはそれぞれ一球だけスライダーを持つてるんだ」「スライダー

- ④ 「を磨こう」
「スライダーを磨こう」口にするよりもっと強く胸に刻む」

(正木僚、丸岡賢人、井小路馨)

2016年度 東北大学 前期 国語

三 古文（日記）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★★	35分	阿仏尼『うたたね』からの出題。阿仏尼は鎌倉時代後期の女流作家・歌人。代表作としては、初期の作品である『うたたね』のほかに、鎌倉への紀行文ならびに鎌倉での滞在記として晩年に著した『十六夜日記』が挙げられる。『うたたね』は身分違いの貴族との失恋を回想した短編であり、阿仏尼が出家して「尼」となった経緯も、この中で語られている。	本文は読みにくい文章であったが、第5段落までは語の省略も少なく、比較的内容も把握しやすい。しかし、第6段落では抽象的な表現が続き、どんな出来事について書かれているかを読み取るのが難しい。問(五)を除くすべての設問が第5段落までに集中していることから、第6段落の解説にこだわりすぎない判断が求められる。 設問については、どの問題も標準的な難易度を上回る。問(三)の和歌解釈はもちろんのこと、問(一)や問(五)の現代語訳に至るまで、文脈を踏まえた多義語の解釈が要求される、手ごわい問題がそろっている。

《この解説の使い方》

本文読解

「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のあ
る人が実際に本文を読むとき何を考えているか（「本文を読み始
める前に」および「通読」の◎部分）や設問解説では述べられな
かった重要なポイントなど（「通読」の★部分）について書いて
ある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を
読むのに時間を使い過ぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分
に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」
レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受
験生レベルの古文知識でつくれる簡単な訳になっている。ほかの
項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問(一) ① 実に理解しがたく

② 通り過ぎることができず

③ どのように申し上げただろうか。

問(二) 障害が多く、恋人の訪れが長く途絶えている状況。（22字）

かつてないほど、恋人の訪れが長く途絶えている状況。（24字）

問(三) 美しい紅葉を山風が吹き散らすことを望まないように、人に知られる

ことなくあの人と約束した男女の間の言葉を、あの人の冷たい態度が
台無しにしてしまえとは思わなかったのに

問(四) 恋人からの、書きぶりにも内容にも心のこもった手紙に心引かれるた

めに、会えないつらさが募り、かえって動揺する心情。(56字)

問(五) 夢見心地のまま、不本意ながらも恋人と(あの人と) 起き別れた朝の私の袖を濡らす涙は、ますます恨み嘆くようで、

本文読解

本文を読み始める前に

主要な登場人物が作者とその恋人であろうこと、作者自身の恋について一人称視点で書かれていること、そして恋人との間で手紙や歌などのやりとりがなされるであろうことの三点をおさえればよい。

通読

第1段落第1行〜第2行「さすがに絶くもなりぬ。」

◎抽象的な表現ばかりで何が起きているのかよくわからないので、何かが「障りがち」な状態にあることだけ頭に入れて読み進めてみる。

★「けぢめ」は「違い目」。現代語でも「けじめをつける」の形でよく用いられる言葉。受験用の単語帳には載らないが、古文をスムーズに読むのに役立つので余裕があれば覚えておこう。

★「とにかく」は「あれこれ」とかく。「とまれかくまれ」などがある。

★「神無月」は十月。旧暦(陰暦)の月の表現は一通り覚えておこう。

第2段落第1行「降りみ降らわぶれど、」

◎「いとま」は「①暇②隙間」だが、ここでは時間の間隔のことだろう。古文の「袖」は涙を想起させる。「袖の暇がない」は「袖が涙で乾く間もないほど悲しい」の意だろう。

いほど悲しい」の意だろう。

◎「心地」は「①気分②体調」。「袖のいとまなき」状態が体調によるものとは考えにくいので、ここでは「気分」だろう。

◎阿仏尼は相当憂鬱な気持ちで日々を過ごしているようだ。

★「くみくみ」は「くしたりくしたり」を意味する表現だが、覚える必要はない。

第2段落第1行〜第2行「絶えて程経る隔つるも、」

◎「絶えて程経る」のは恋人の訪問だろう。阿仏尼の憂鬱な気分や第1段落の「障りがちな葦分け」とも整合性が取れている。

◎「おぼつかなし」は「①はつきりしない②不審だ・気がかりだ③待ち遠しい」。ここでは、恋人の訪れが長く途絶えていることを「待ち遠しく」感じる気持ち、「気がかりに・不安に」感じる気持ちの両方があり得そう。

第2段落第2行「今はかくにくかりける。」

◎「世」は「①現世②俗世③男女の仲」。ここでは阿仏尼と恋人の関係について書かれているので、「男女の仲」と判断する。

◎「今はかくにこそ」の「かく」が指す状況はすぐにはわからない。傍線部が引かれている箇所なので、設問を解きながらじっくり考える。問(二)は第2段落までの内容で答えられそうだから、解答してしまおう。

第3段落第1行〜第2行「いとせめてくしけれど、」

◎傍線部がある。第3段落の範囲で解答可能な問題のようなので解いてしまおう。

◎「恥づかし」は「①気が引ける②こちらが恥ずかしくなるほど立派だ」。阿

仏尼は、本人にも理解しがたい動機から参詣する自分のことを仏はどう思うだろうかと、仏の心中を想像し、気兼ねしていると考えられる。前者の意味で読もう。

★「かつ（う）は」は「一方では」。対比の表現によく用いられる。

★「あやし」が現れたときには、プラス・マイナスのどちらの意味で用いられているかを気にしよう。

第3段落第2行〜第3行「二葉より参くは御前に。」

★「心づから」は「自分の心から」。受験用の単語帳に掲載されることはまずないが、覚えておくと便利な語の一つ。

★「愁ふ」は「嘆願する・嘆く」。漢字は異なるが「憂ふ」と同義である。「嘆く・悲しむ」の意味で用いられることが多いが、原義は「不平や嘆きを他人にもらすこと」にある。

第4段落第1行〜第2行「供なる人々に降りぬ。」

◎「心にもあらず」は「①無意識に②不本意ながら」。ここでは、お供の人々に急かされて広隆寺を去ろうとしているので、「不本意ながら」の意味だろう。

◎「過ぎがてに」は見慣れない表現だ。傍線部なので、じっくりと考える。

第4段落第2行〜第4行「高欄のつまゝ立たれず。」

★「つま」は「端」。地味な名詞だが、問われたら訳せるようにしておこう。

★「心の色」は「心のさま・心に思いしむようす」を意味する表現。

★「憂し」は「つらい・苦しい・わずらわしい」など、さまざまなマイナスの感情を表す多義語である。訳語を逐一覚えるよりも、文脈に応じて適切

な現代語を考えられるようにしよう。

★「とみに」は「すぐには・急には」。下に打消の表現を伴うことが多い。

◎阿仏尼がしばし悩みを忘れて景色に見入っている場面だろう。

第4段落第4行〜第6行「折しも風さくらんかし。」

◎傍線部が引かれているが、和歌解釈は時間がかかるので後回しにする。主題だけでもおさえておきたいが、「風吹けとは思はざりしを」では何がしたいのかわからない。諦めて先を読み進める。

◎「思ひ混ずることなき心の中」とあるから、和歌に表現された気持ちで阿仏尼はいっぱいいっぱいだろう。

★「かし」は念押し・強意の終助詞。

第5段落第1行「帰りてもいづげたれば、」

◎「帰りてもいと苦しければ」とあるから、先ほどの和歌の主題は「苦しい気持ち」にあるのだろう。

◎「文」は「①手紙②書物③学問・漢詩」。今回は文脈より明らかに「手紙」。

◎この手紙は当然、恋人の貴族から届いたものだろう。

◎恋人からの手紙に「胸うちさわぐのはなぜだろう。単に喜んでいるわけではないようだ。

第5段落第1行〜第2行「ただ今の空く所あれど、」

◎貴族からの手紙の描写のようだ。

◎「怠り」は「①無沙汰②失敗③謝罪」。ここでは、阿仏尼のもとを何日も訪れていない「無沙汰」、あるいはそのことについての「謝罪」の意味、どちらでもよさそうだ。

◎「細やかに」は「①愛情が深い②丁寧である③色が濃い」。「こ」では、「色濃く」書かれている墨の具合、「丁寧」書かれている筆の流れのことだろう。

第5段落第2行～第3行「例のなかなかこえけん。」

◎「かき乱す」「心迷ひ」→「言の葉の続きも見えず」の流れだから、気分がふさいで手紙の続きが読めなくなったのだろう。

◎傍線部(ウ)の方は解答が難しそうなので後回しにする。

◎(3)のほうは簡単そう。「言の葉の続きも見えず」ていないのだから、返事はできていないはず。「反語で訳しておこう。」

★実は、傍線(3)の解釈は真面目に考え始めると超難問。正解した人も解説を讀んでみよう。

第5段落第3行～第4行「名残もいとくれぬも、」

◎この「名残」は手紙を讀んだあとの「名残」だろう。

◎「つらさ」は形容詞「つらし」の名詞形。「つらし」は「①薄情だ・冷たい

②たえがたい」。阿仏尼は、訪れの途絶えている貴族のことを「薄情だ」と思っていたのだろう。

第5段落第4行～第5行「人わろき心くる水荃の跡」

◎注にある「問ふにつらさ」の説明を参考に、「恋人の貴族からの氣遣いに、かえって心が苦しくなる」という主題だと考える。

第6段落第1行～第2行「例の人知れく返りたる。」

★ここから最終段落に入る。個々の単語の意味がわかって、全体として何

について書いているのかがわかりにくい文章が続く。唯一の傍線部が現代語訳問題なので、その近辺だけ読むのも手である。

◎「契り」とあるから、恋人の貴族が内容にかかわる箇所であることは見当がつく。

★「夢の心地」に「尽きせず」という強調表現がついていることに注目する。

◎これまでの内容を踏まえて、「阿仏尼にとってまったく夢のような気がすること」＝「恋人が自分のもとを訪れること」と推測できると、この段落が非常に読みやすくなる。

◎「涙のみむせ返りたる」より、阿仏尼の気持ちはまた暗くなっているようだ。

★段落冒頭の一文については、受験生が本番で意味を把握するのは難しい。しかし、意味がわかるまで何度も繰り返し読むのではなく、ひとまずは傍線部や結末まで辛抱して読み通そう。

第6段落第2行～第3行「あか月にもく心地して、」

◎「あか月」や「枕」先ほどの「契り」からして、「貴族が阿仏尼のもとを訪れ、一晚を明かした」といったところだろう。

◎「ただ今の命を限る」は尋常な言い方ではない。阿仏尼は相当動揺しているようだ。

第6段落第2行～第3行「我にもあらましくて、」

◎傍線が引かれているので、じっくり考える。

第6段落第3行～第4行「君や来しくんしける。」

◎本文終了。解き残した設問に入る。

設問解説

問(一)

解答

《合格答案》

- (1) とても不思議で
 (2) 通り過ぎることができず
 (3) どのように申し上げただろうか。

《満点答案》

- (1) 実に理解しがたく
 (2) 通り過ぎることができず
 (3) どのように申し上げただろうか。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(1) 「あやし」は「不思議だ」を意味する重要な形容詞。文脈に応じてプラスの意味(「神秘的だ」など)、マイナスの意味(「疑わしい・ひどい」など)、ニュートラルな意味(「不思議だ・並々でない」など)で訳し分ける必要がある。

文脈を確認する。まず、阿仏尼が「あやし」と捉えているのは傍線部直前の「にはかに太秦に詣でてんと思ひ立ちぬる」ことである。この太秦参詣の思いつきについて、阿仏尼が参詣をためらう気持ちと仏を頼りにする気持ちを比べ、後者が前者を上回るとというのが第2段落全体の内容である。前者の参詣に対するためらいを表すのが「かつうはいとあやしく、仏の御心の中恥

づかしけれど、」であり、傍線部はこのような文脈の中で解釈する必要がある。

すると、単に「不思議だ」と訳すよりも、「仏の御心の中恥づかし」につながるような、マイナス寄りの現代語に置き換えるのがふさわしいとわかる。あとは「いと」の訳出を忘れなければよい。

(2)

動詞「過ぐ」に、「しかねて・することができず」などと訳す「かてに」を合わせた形である。単語帳に記載されたり、頻繁に目にする表現ではないので、多くの受験生は「過ぎがてに」にふさわしい意味を文脈から考えることになる。

状況を整理する。第3段落の傍線部より前の部分では、時雨が降る前に急いで帰ろうとする阿仏尼が、法金剛院の美しい紅葉に目をとめたことが述べられている。そのまま傍線部以降を読み進めると、阿仏尼が車を「降りて」「木々の紅葉」を鑑賞したことが語られる。ここで再び傍線部直前に目を向けると、「法金剛院の紅葉が(面白ければ)」「過ぎがてに」とある。ここから、阿仏尼が美しい紅葉に引きとめられ、法金剛院について立ち寄ってしまったことがわかる。よって、「かてに」という表現を知らずとも、「過ぎがてに」が「通り過ぎることができずに」などといった内容を指すことは十分見当がつく。

(3)

「聞こゆ」は謙讓語本動詞。目的語は直前にある「御返り」すなわち「手紙の」返事」である。助動詞「けむ」には過去婉曲と過去推量の二つの意味があるが、下に体言が続かないので、過去婉曲ではなく過去推量と判断する。

問題となるのは、疑問詞「いかが」を疑問と反語のどちらで解釈するかである。傍線部の前後の内容を踏まえながら、疑問あるいは反語で訳す根拠を考えていく。

まず、「いかが」を疑問とした場合と反語とした場合とで、傍線部の表す内容がどう異なってくるのかを考える。疑問として訳した場合、傍線部の訳は「どのように申し上げただろうか」となり、阿仏尼は手紙の返事をしたものの、その内容をはっきり覚えていないことになる。一方、反語として訳した場合には、傍線部の訳は「どうして申し上げただろうか、いや、申し上げなかつた」となり、阿仏尼は手紙の返事をしていないことになる。したがって、阿仏尼が実際に手紙の返事を書いたかがわかれば、傍線部の訳し方も決まる。

そこで次に、阿仏尼が返事を書いたかどうかを読み取れそうな箇所を本文から探すと、次の二カ所が見つかる。まず目につくのは傍線部直前「言の葉の続きも見えずなりにければ」である。この「言の葉の続き」が「読む言の葉の続き」を意味するのであれば、阿仏尼は貴族からの手紙を読み終えられなかつたことになり、その手紙に対する返事も書いていないと考えられそう。しかし、たとえ手紙を途中までしか読めなかつたとしても、返事を書くことができなくなるわけではない。逆に、ここが「書く言の葉の続き」を意味するのであれば、どうなるだろうか。阿仏尼は相手の手紙を読み終えて返事を書き始めたものの、途中で何を書けばよいかわからなくなっている状況と考えられる。この場合も、結局阿仏尼が手紙を書き終え、貴族に返事を出したかどうかの判断には結びつかない。

二つ目は傍線部の少し後ろにある「名残」である。この「名残」が表現する内容の候補としては、「手紙を読んだあとの名残」「返事を書いたあとの名残」の二つがある。後者であれば、阿仏尼が貴族への返事を出したことは

つきりわかる。しかし、第5段落を読み込んでも、この「名残」がどちらの意味で用いられているかの判断はつかない。

最後の手段として、段落外の内容を根拠にすることを考える。その場合、第6段落で恋人の貴族の訪れがあったことが述べられていることから、「もし手紙の返事をしていなければ貴族の訪れもなかつたはずだ」と考えてこれを根拠に疑問の訳出をするのが自然だろう。

しかし、段落外の内容を根拠にしていること、そしてその根拠も推測に基づく弱いものであることから、反語の訳出を完全に退けることは難しい。「反語と疑問のどちらか一方に絞れ」という非常に難しい要求にあえて答えるならば、といったところの《満点答案》である。

問(二)

解答

《合格答案》

障害が多く、恋人の訪れが長く途絶えている状況。(22字)

《満点答案》

障害が多く、恋人の訪れが長く途絶えている状況。(22字)

かつてないほど、恋人の訪れが長く途絶えている状況。(24字)

難易度 ★★☆☆

設問パターン 内容説明・要約型

解説

傍線部を含む第2段落全体の内容を踏まえて考える。

傍線部より前の箇所では、「阿仏尼にとって憂鬱な日々が続くこと」「恋人の訪れが絶えて久しいこと」が語られている。傍線部以降の箇所では、「今はかくにこそ』と思うようになり、この上ない悲しさが募ること」が語られ

る。第2段落全体にわたって阿仏尼の感じる悲しさ、心細さは、「恋人の訪れが絶えて久しいこと」に起因すると考えるのが自然だろう。したがって、「今はかくにこそ」と阿仏尼が捉え、心細さを感じている状況も、恋人との関係にかかわるものとして解答を考えていく。

より詳細に見ていく。傍線部の直後までを抜き出すと、『今はかくにこそ』と思ひなりぬる世の心細さ」とある。「世」は重要な多義語で、「①(来世と対比する形での)現世②(出家後の生活と対比する形での)俗世③男女の仲」などを表す。今回の文脈では、「世」は「男女の仲」、特に「阿仏尼と恋人の貴族の関係」の意味で考えるのが、最も意味の通る読み方だろう。よって、解答の核心は「恋人の訪れが長く途絶えている状況(16字)」にあると考えられる。

しかし、これだけでは解答欄が三分の一近く余るので、もう一要素解答につけ加える。その内容としては、「恋人の訪れが長く途絶えている」ことの原因である「障害が多いこと」や、本文「慣らはぬ日数」を反映した「かつてないほど」などが考えられる。本問のように、必ずしも問題文に要求されない要素を解答に補う場合には、必ず本文中の記述・表現に収まるよう心掛ける。

問(三)

解答

《合格答案》

人に知られることなく結ばれた二人の仲の言葉を、紅葉を散らすように、嵐が吹いて散らしてしまえとは思わなかったのに

《満点答案》

美しい紅葉を山嵐が吹き散らすことを望まないように、人に知られること

なくあの人と約束した男女の間の言葉を、あの人の冷たい態度が台無しにしてしまえとは思わなかったのに

難易度 ★★★★★

設問パターン 和歌

解説

和歌の解釈を求める問題で考えるべき点は三つある。すなわち、詠み手のおかれている状況、詠み込まれている主題、用いられている表現技巧である。まず、意味こととまわりに分けたうえで、(イ)の和歌の直訳を試みる。

人知れず／契りし仲の言の葉を／嵐吹けとは／思はざりしを

単語や慣用句として難しいものはほとんどない。「嵐吹け」の「吹く」が直前の「言の葉」を目的語とすること、末尾の助詞「を」が逆接を表すことなどは、即座にわかるだろう。ただ一カ所、上の句の「契る」の意味には注意しなければならない。この点についてはあとで述べる。以上を踏まえて、ひとまず、「人に知られることなく『契りし仲の言の葉』を嵐が吹き飛ばせとは思わなかったのに」という大まかな訳をしておく。

次に、(イ)の和歌が詠まれたときに、詠み手Ⅱ阿仏尼のおかれていた状況を整理しておく。第2段落の内容より、阿仏尼は、訪れの長く途絶えている恋人との関係に不安を感じる日々が続いていることがわかる。実際に(イ)の和歌が詠まれたのは、続く第3段落、法金剛院の見事な紅葉を眺めて、しばし心の安らぎを感じた阿仏尼が、折からの風に物騒がしくなったので、家に帰ろうと出発したときのことである。

最後に、主題と表現技巧について考える。原則として、和歌の主題は下の句に注目して解釈する(倒置表現が用いられている場合などの例外はある)。

今回の場合は、「嵐吹けとは思はざりしを」||「言の葉を」嵐が吹き飛ばせとは思わなかったのに「がその主題にあたる。では、その嵐が吹き飛ばす「契りし言の葉」とは何であるか。

これを考えるために、まずは先ほど棚上げにしておいた「契る」から見ていく。「契る」は重要な古語で、「約束する・将来を誓う」などと訳す。ここで、名詞「契り」のもつ「男女の結びつき」の意味を根拠に、「契りし仲の言の葉」を「結ばれた男女の間で交わされる言葉」と捉えることが考えられる。しかしこの訳では、交わされる「言葉」がどのような性格のものかが不明瞭であり、それゆえに、その「言の葉」を散らすような「嵐」の意味もつかみづらくなる。このため、「契りし言の葉」は、動詞「契る」の「約束する」の意味を重視して、一旦「約束した男女の間の言葉」と訳しておく。この約束が単なる逢瀬の約束にとどまるのか、それとも将来を誓い合うような約束なのかは本文から判断することはできない。しかしいずれにせよ、「言の葉」の意味が「約束の言葉」として具体的に把握されることで、「嵐」がこの約束の言葉を無下にしたり、台無しにしたりするようなものであることがわかる。

次に、「」で用いられている比喩表現について見ていく。「言の葉」を「嵐」が吹き飛ばすというのは、もちろん漢字「葉」を利用した比喩である。このことを意識すると、「Aを『嵐』が吹き飛ばすように、『言の葉』をBが台無しにする」という比喩の構図が読み取れる。とすると、解答の際には、和歌中では埋められていないA、Bの内容を補うのが望ましい。

先ほどの状況整理でもふれたとおり、この和歌は、紅葉の鑑賞後に詠まれた歌である。したがってAには「紅葉」が当てはまる。「言の葉」↓「紅葉」と、「葉」をきっかけに容易に連想することができはす。一方Bについても、Aと同様、先ほどの状況整理を踏まえて考えればよい。「恋人である

貴族の訪れが途絶え、不安を感じている」という阿仏尼の状況を考えると、「約束した男女の間の言葉」を台無しにするのは「相手の貴族の態度」、もう少し踏み込むならば、長く来訪を絶やすような「相手の貴族の薄情な態度」といえるだろう。

以上を踏まえて解答を仕上げる。

問四

解答

《合格答案》

恋人からの、書きぶりにも内容にも心のこもった手紙に心引かれるために、かえって動揺する心情。(45字)

《満点答案》

恋人からの、書きぶりにも内容にも心のこもった手紙に心引かれるために、会えないつらさが募り、かえって動揺する心情。(56字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

恋人の貴族からの手紙を読んだ阿仏尼の心情を、第五段落全体の内容を踏まえながら考える。

まず、傍線部を内容ごとに分け、大まかな意味をつかむ。

なかなか/かき乱す心迷ひ

「なかなか」は重要な副詞で、「かえって」などと訳す。「かき乱す」「心迷ひ」はどちらも「心が乱れること」を表すので、大ざっぱに、「かえって動

揺する心情」について書いていると把握しておく。ここに補うべきは、「なぜ」動揺するのか、および「何について」動揺するのかである。この二点は、解答を考えるうえでは完全に分けることはできないが、解答を書くうえでは、両方の要素を漏らさないように意識的に区別する。「何について」阿仏尼が動揺を感じたかといえば、それは「恋人からの手紙の内容」である。このことは傍線部の前後を一読して容易にわかる。では、「なぜ」恋人からの手紙に、阿仏尼は「かき乱す心迷ひ」を感じるようになったのか。一旦本文の記述を整理してみると、「阿仏尼が恋人からの手紙を読む↓阿仏尼が心の動揺を感じる」という順番になっている。しかし、これだけでは阿仏尼の動揺の原因を理解することはできない。つまり、「なぜ」の部分に関しては、本文の内容から直接読み取ることができない。読み取ることができないからこそ、解答ではしっかりと補う必要がある。

手掛かりとするのは、傍線部中にある「なかなか」、そして傍線部直前の「例の」である。「なかなか」の使い方をよく考えてみると、「もしAでなければBではないだろうに、Aであるばかりに『かえって』Bである」という図式が成り立つ。今回の場合、Bに入るの明らか「阿仏尼の心が動揺する」という内容である。では、Aに当てはまるのはどのような内容か。ここで初めて、阿仏尼の受け取った手紙の内容に目を向ける。本文中、この手紙の描写には「ただ今の空のあはれに日頃の怠りをとり添へて、細やかに書きなされたる墨つき、筆の流れも、いと見所あれど」と多くの字数が割かれているので、ここを整理していく。前半「ただ今のあはれに日頃の怠りをとり添へて」は手紙の文面に関する記述である。「ただ今のあはれ」とは、「たったいまの空模様の趣深さ」を指す。空が時雨模様に変わった折に手紙を出すのは、恋人同士のエチケットであり、阿仏尼の恋人はしっかりとそのことに言及した手紙を送ってきているのである。「日頃の怠り」が指すのは、「長い

日数、阿仏尼のもとを訪れていないことの謝罪」であろう。後半「細やかに書きなされたる墨つき、筆の流れ」は文の筆づかいに関する記述である。「細やかに」や書き「なま」れたる、という表現から、丁寧な、気の行き届いた書きぶりであることが読み取れる。以上より、貴族からの手紙を「書きぶり、内容ともに心がこもっている」と阿仏尼は評価していることが読み取れる。これが先ほどのAにあたる。

では、「手紙の書きぶりや内容に心がこもっていること」から「心が動揺すること」が帰結するのはなぜか。これを考えるのが本問の最終段階であり、ここで先ほど手掛かりとして挙げた「例の」が生かされる。「例の」は「いつもの・いつものように」などと訳す最重要古語の一つである。よって、「例のなかなかかき乱す心迷ひ」とある以上、「心のこもった手紙」を受け取るたびに、「いつも」阿仏尼は「心迷ひ」を感じているはずである。一度、一般化して思考を進める。恋人からの「心のこもった手紙」を受け取った人は、そのたびごとどのように感じるものか。手紙が素晴らしければ素晴らしいほどその贈り主に心惹かれ、受け取ることに「手紙ではなく、直接会いたい」と感じるはずである。これは阿仏尼も例外ではあるまい。しかし、(問二で確認したとおり)阿仏尼の場合は「恋人と会えない」という状況が長く続いている。つまり、「心のこもった手紙」を受け取り、「会いたい気持ち喚起される」も、そのたびに「会うことのできない」つらさを阿仏尼は味わっている。それゆえ阿仏尼は、恋人からの見事な手紙に「かえって動揺を覚える」。以上の内容をまとめて、解答とする。

問(五)

解答

《合格答案》

夢見心地のまま、不本意ながらも（恋人と）あの人と）起き別れた朝の私の袖を濡らす涙は、ますます恨み嘆くようで、

《満点答案》

夢見心地のまま、不本意ながらも恋人と（あの人と）起き別れた朝の私の袖を濡らす涙は、ますます恨み嘆くようで、

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

まず、意味ごとのまとまりに分けたうえで直訳を試みる。

我にもあらず／起き別れにし／袖の露、／いとどかこちがましくて

「我にもあらず」は重要な連語で、「①果然としている②自分の意志ではなく」などと訳す。どちらの意味で訳すのが適切かは、ほかの単語との兼ね合いで判断する。「起き別れにし」が表すのは、恋人と結ばれた夜が明け、相手が阿仏尼のもとを去ることである。「袖の露」はよくみられる表現で、「袖を濡らす涙」を表す。「この涙はもちろん筆者＝阿仏尼の涙である。」「いとど」は「ますます・いっそう」などと訳す副詞。「かこちがまし」は動詞「かこつ」から派生した形容詞であるが、もとの動詞「かこつ」が「①口実にする②恨み嘆く」などと訳す多義語であるので、「かこちがまし」も一旦保留としておく。すると、傍線部全体の大まかな訳は『我にもあらず』恋人と起き別れた朝の袖を濡らす私の涙は、ますます『かこちがまし』となる。

次に、保留とした「我にもあらず」「かこちがまし」の意味を前後の文脈を踏まえつつ考える。「我にもあらず」の訳として、おもな意味である「果然としている」と「自分の意志ではなく」の二つを検討する。前者について

は、最終段落全体にわたって筆者の「夢の心地」が語られていること、「起き」たばかりの状態であることを踏まえて、より正確に「夢見心地で」と訳すことで、傍線部以外の内容との整合性が取れる。また、これまでの設問でもふれてきたとおり、この文章では、筆者の「恋人と会えない悲しさ」が全体にわたって述べられている。すると、せっかくな久しぶりに恋人と会えたにもかかわらず、朝を迎えて別れざるを得ないことは、筆者にとっては「不本意な」ことと考えられる。よって後者の意味での解釈も成り立つ。

「かこちがまし」の訳としては、「かこつ」のおもな二つの意味のうち、後者の「嘆く」にもとづくのがよい。繰り返しになるが、この文章においては筆者の抱く「恋人と会えない悲しさ」が何度も話題に上る。さらに、長く訪れの絶えた恋人と久しぶりに結ばれるものの、一晩で別れざるを得なかったというのがこの場面の趣旨である。これらのことを踏まえると、恋人との別れに際して流した涙が、阿仏尼には相手を「恨み嘆く」涙のように感じられたと考えられる。

本文解説

現代語訳

そうはいくものの絶えてはいない夢のような心地は、かつてと変わる違目も見えないものの、あれこれと都合が悪く障害が多い状態のまま、十月にもなった。

降ったり降らなかったり定まらない時節の空の様子は、いっそう私の袖が涙で乾く間もない心地がして、寝ても覚めても物思いにふけてつらく思うけれども、（恋人の訪れの）途絶えて日々が過ぎるもどかしさのまま、経験

したことのない日数が空くことも、「いまやこのように」と思うようになって二人の関係の心細さは、何にたとえても不十分なほどに悲しかった。

ひどく思いつめて、落ち着かない心が引き起こしたのであるうか、唐突に太秦の広隆寺に詣でようと思いついたのも、一方ではたいそう理解しがたく、仏の御心のうちが恥ずかしいが、(広隆寺には)幼時から参り慣れていたので、格別頼もしい気がして、自分の心から起こった悩ましさを訴え申し上げようと思ったのであろうか、しばらくは仏の御前に(額づいていた)。

お供の人々が、「きつと時雨れるにちがいない。早くお帰りください」などと言うので、不本意ながら急いで(広隆寺を)出たが、法金剛院の紅葉が、今が盛りと見えてとても趣深いので、通り過ぎかねて牛車を降りた。高欄の端にある岩の上に腰を下ろして、山のほうを望み見ると、木々の紅葉が色とりどりに見えて、松に懸かっている枝、(観賞したときの)心のさまもほかとは異なる気がして、まことに見どころが多いので、つらい宮仕え先での暮らしのことはいつそう忘れられてしまったのであろうか、すぐに立つこともできない。ちょうどその時、風までもが吹いて、物騒がしくなったので、見るのを途中でやめるようにして出発するとき、

人知れず……(美しい紅葉を山風が吹き散らすことを望まないように、人に知られることなくあの人と約束した男女の間の言葉を、あの人の冷たい態度が台無しにしてしまえとは思わなかったのに)

と思いつけるにつけても、まったくほかのことを考えることのない心のうちであるようだ。

家に帰ってもたいそうつらいので、すこし横になっているうちに、(あの方からの)お手紙といって(侍女が)受け取ったが、胸が騒いでひき広げて

みると、ただいまの空の趣深さに平素の無沙汰を合わせて、こまやかに書かれている墨の具合、筆の流れも、実に見どころがあるが、いつものようにかえってかき乱れる心の動揺に、言葉の続きもわからなくなってしまったので、お返事もどう申し上げたであらうか。(お返しの手紙を使いを持たせてやった)あとの気持ちもたいそう心細くて、このお手紙をしみじみ見るにつけても、日頃の薄情さはみな忘れられてしまうのも、体裁が悪い心のほどだと、また(手紙を)放っておかれて、

これやさは……(さてはこれが例の「問ふにつらさ」だろうかと思われ
る手紙のやさしい言葉に、かえって耐えがたさを感じることがたくさん
あり、手紙に涙がこぼれます)

いつもの、秘密としている恋の通い路の近いところさえ、道もおぼつかない夕闇のなかを、(あの方が来たのも)約束を違えないしるし程度のことであって、ひたすらに夢のような心地がするにつけても、(いままでのつらさを)言葉に出して申し上げようもないので、ただ自分でもわからない涙にむせ返るばかりだった。暁になった。枕に近くひびく鐘の音も、ただいまの寿命を定めるような心地がして、夢見心地のまま、不本意ながら(あの人と)起き別れた袖の涙は、ますます恨み嘆くようで、「本当にあの方は来たのか」とも判断のつかない恋の通い路に、いつもの頼もしい人らしい様子でこっそりと出ていったのも、重ね重ね夢のような心地がしたことよ。

用語解説

さすがに そうはいつてもやはり

ありし ①過去の・以前の②例の

けしき ①様子②表情③機嫌

いとど ますます・いっそう

いとま ①暇②隙間

こころ 【心地】 ①気分②体調

ながむ ①もの思いにふける②遠くを見つめる

わづ【自バ四】 ①つらく思う・寂しく思う②落ちぶれる

よ【世】 ①現世②俗世③男女の仲

あかず ①満足しない②飽きることがない

あくがる【自ラ下二】 ①うわの空になる・心引かれる②さまよい歩く

あやし 不思議だ

はづかし【恥づかし】 ①気が引ける②こちらが恥ずかしくなるほど立派だ

心にもあらず ①無意識に②不本意ながら

おもしろし【面白し】 趣深い・風流だ・興味深い

うし【憂し】 つらい・苦しい・わずらわしい

ちぎる【契る】 ①約束する・将来を誓う②夫婦の関係を結ぶ

ひごろ【日頃】 ①数日間②近頃

おこたり【怠り】 ①無沙汰②失敗③謝罪

こまやかなり【細やかなり】 ①愛情が深い②丁寧である③色が濃い

例の いつもの・いつものように

なかなか かえって

人わろし 体裁が悪い・みっともない

我にもあらず ①呆然としている②自分の意志ではなく

(上岡公聖、山崎恭子、築島愛美)

2016 年度 東北大学 前期 国語

四 漢文（清代の逸話）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	20分	劉廷璣『在園雜志』からの出題。劉廷璣は清代の人物。 劉廷璣（りゅうていいき さいえんざつし） 字は玉衡という。劉廷璣は『在園雜志』のほかにも『青燐熒火』『白銀化鷄』『大飯量』など多くの小説を執筆している。	字数は216字。文章はストーリーやテーマがはっきりしており、読みやすいものだった。そのぶん問いは少し癖のあるものになっている。 問(一)はやさしい。問(二)(a)は難しくないが、(b)をきちんと論理立てて解くのは難しい。ストーリーの把握やほかの問いを解くのに影響が小さいものであったので、後回しにするのが得策だろう。問(三)の現代語訳は、そもそも「以」がポイントであるということを見抜けなかったかもしれない。良問であった。よく復習してほしい。問(四)は内容さえ把握していればさほど難しい問いではなかった。問(五)は問題作成者の意図をくんで解答するという意識が必要であった。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名（作品名を書き下す場合を除く）のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問(一) (1) たまたま (2) たとひ「たとい」

問(二) (a) そとにあきなふものあり「そとにあきなうものあり」

(b) いぬいづくにかきするやと「いぬいづくにかきするやと」

問(三) 船頭は乗客が満員になり追い風になったので、乗船するように何度も催促した。

問(四) 商人は腹痛のため船を降り、ついてきた犬に銀の見張りを言いつけたが、急な出発に急いで自分だけ乗船した。(50字)

問(五) 餓死したのちも主人の命令を守って銀を見張り続けた犬の話の聞き、

人間よりも、忠義を尽くす犬をそばにおくべきだと思ったから。

(60 字)

本文読解

通読

妹の倩の董副使紹孔、昔西安太守に任ぜられしとき、余の為に言ふ。

◎注より、「妹倩―妹の夫」「副使―官名」「太守―官名」。董紹孔さん。官名はなんか難しいからいいや、無視しよう。

▼なんとかっていう人がわたしに言った。

秦中に^(a)有商人于外者。

◎注より、「秦―陝西省の別称」。(a)は書き下しなんだろう。「有」「商」「者」

だから、たぶん商人がいましたって感じだろう。とりあえず先にいこう。

▼陝西省に商人がいた。

帰るに、一犬を挈へて以て行く。

▼帰るとき犬を連れていった。

黄河に抵り、行囊船に在り、人の満つるを候ちて乃ち渡る。

◎注より、「行囊―荷物」。荷物は船にあるってどういうことだ？ あー、そっか商人が帰ってきたんだから、売れなかったものとか仕入れたものとか持ってるのか。とりあえず船に積んだのかな。邪魔だしね。

▼黄河に着いて、荷物は船にあって、人がいっぱいになるのを待ってそれから渡る。

(1) 側腹痛ければ瀉さんと欲し、亟やかに岸に上るに、犬随ひて往く。

▼お腹が痛かったので出そうと思って岸に上がると、犬がついてきた。

◎かわいいなあ。

布袋の銀五十兩を褰む有り。

▼銀五十兩を袋に入れて持っていた。

◎なるほど、売上金か。こっちは大事だから身に着けてたのかな。

解きて地に置き、戯れて犬に向かひて曰く、

▼地面に置いて、ふざけて犬に言った。

「看ること好くせよ」と。

◎「看」の字は「看守」のように「見張っている」という意味もある。

▼「よく見ておけよ」と言った。

◎犬に銀を見張らせたのか。さっき「戯」ってあったから、商人は、本気で犬に見張らせたわけじゃない。

少頃して、舟子以人満風順、連催登舟。

◎「舟子」は船頭のことだろう。よくわかんないけど、「人満」「登舟」ってあるから、たぶん、満員になったから出発させようとしているんだろう。

帆已に満張たれば、一瞬にして開す。

◎注より「開―出発すること」。

▼帆はすでにばんばんだったので一瞬で出発した。

関中の黄河、水飴を建へすがごとく、対ひ渡ること二十里許にして方めて達す。

◎注より、「関中―現在の陝西省―帯のこと」「建飴―流れの速い様子のこと」「対渡―対岸に渡ること」「二十里―約十キロメートル」。

▼水の流れが速く、対岸に渡るのは約十キロメートルでやっと着く。

◎すごいなその川。

商舟に入り、方めて銀と犬を頼るを悔ゆれども、然れども日暮れて再び渡ること能はず、

▼商人は舟に乗り、初めて銀と犬を忘れてきたのを悔いたが、日が暮れても一度渡ることはできず。

◎あーあ。かわいそうに。

明晨⁽²⁾緹往くも、安くんぞ前銀尚ほ在るを得んや。

▼あくる朝もし行っても、あの銀はまだあるだろうか、いや誰かに取られているだろうか。

◎そりゃそうだろうか。

遂に帰る。

▼とうとう帰った。

◎お腹さえ痛くしなければ……。

越えて明年、河を渡り復た前地を経るに、慨然として曰く、

◎「慨然」は「嘆き悲しむ」と「心を奮い立たせる」の両方の意味がある

けどここでは前者だろう。悲しい話だもんね。

▼あくる年、河を渡ってまたあの土地を通るとき、嘆いて言った。

◎一年たったのか。

「銀已に存すること無からん、犬何帰乎」と。

▼「銀はもうないだろうなあ。……」と。

◎傍線部はわかんないけど、さっき「慨然」ってあったし、「犬もいないだろうなあ」くらいの意味かなあ。

往きて尋ぬるに、狗皮の地を覆ふを見る。

◎あれ、探しに行っているってことは、さっきの傍線部(b)は「犬はどこかにいる」って言っているってことか？ あとで考えよう。

▼行って尋ねると、犬の皮が地面を覆っているのを見つけた。

◎お、まさか!?

之を檢ぶるに、白骨一堆のみ。

▼これを調べると、白骨が一山だけあった。

◎ああ……やっぱり死んでたのか……。

商焉を憫れみ、地を掘りて其の骨を埋むるに、骨尽くれば則ち前銀尚ほ在り。

▼商人はかわいそうに思い、地面を掘って骨を埋めると、骨の下にはあの銀がまだあった。

◎「憫」ってお前が置いてけぼりにしたせいだけだ……銀が一年間誰にも取られずにあったの!?

蓋し犬銀を守りて離れず、餓死するを甘んじ、尸しかばねを銀上に覆ふのみ。

◎この「耳」は限定じゃなくて断定だろう。

▼思うに犬が銀を守って離れず、餓死し、死体で銀を覆い隠したのだろう。

◎すこいなあ、主人がふざけて「看好」って言ったのをずっと守ってたんだ……。しかも死してなお守り続けるってのがすごい。

商泣きて之を瘞うづめ、為に塚を立つ。

▼商人は泣いて死体を埋めて、犬のために墓を建てた。

◎どうでもいいけど銀は持って帰ったのかなあ。ちょっと気になる。

諺ことわざに云ふ、「寧畜ねいこくニ有義犬」と、

◎「寧」だから疑問・反語か。いや、「むしろ」と読んで選択形かもしれない。「義犬」なんて入ることわざ知らないし、きっと中国のなんだろう。

言ことばぎかな言ことばや。

◎『論語』の「賢哉回也」で有名な句形だ。

▼よいなあ、この言葉は。

◎うーんいい話だった。いい犬エピソード↓「寧畜有義犬」↓いい言葉だなあ、ということとは、「寧畜有義犬」はいい犬エピソードをよく表しているんだろう。

解答 (1) たまたま (2) たとひ「たとい」
難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 漢字の読み

解説

(1)

↓知識問題。現代語でも「偶然」たまたま」なので、連想することもできるとは思うが、たとえ思いついたとしても書く勇氣はないだろうし、やはり知識問題である。「偶々」というふうには、「と(二)の字点…上の漢字の訓が繰り返して語であることを示す踊り字」を用いることもある。これがあってもなくても「たまたま」と読む。また、「適」「会」の字も「たまたま」と読むことがある。似たようなシリーズでいくと、「抑おさ」「各おの」「数しほ」「屢しばしば」「益ますます」「愈いよいよ」「弥いよいよ」なんかがある。

(2)

「縦」の字の読み方はおおよそ「パターンで、「たとひ」か「ほしいまま」ス」である。前者は「たとえ」としても」という逆接仮定条件、後者は「気の向くまま・勝手にする」という意味の動詞である。ここまでは基礎知識。問題は、今回そのどちらの読みを採用するかという判断である。
ポイントは直後の「往」の送り仮名「クモ」。これを見て「たとひトモ」のかたちを思い浮かべられるとよい。

問(一)

解答 (a) そとにあきなふものあり「そとにあきなふものあり」

(b) いぬいづくにかきするやと「いぬいづくにかきするやと」

難易度 ★★☆☆☆

問(一)

設問解説

設問パターン ひらがなの書き下し

解説

(a)

「有」は返読文字。返読とは、下の語から上の語（＝返読文字）に戻って読むことをいう。その中でも特に、述語＋主語のかたちをつくるものである。したがって「有」の下に主語がくるはず。

次に、どこまでが主語なのかを考えよう。「于」は「於」とほぼ同じように使われ、多くの場合置き字である。「場所・時間・対象(二)」「起点(ヨリ)」「比較(ヨリモ)」を示す前置詞。したがって、「于」の直前の語「商」は動詞である。いろいろ試してみると「于」を場所を示すと考えて「外に商ふ者有り」と訓読するのが最も適切だとわかるだろう。

(b)

こういったシンプルな文の書き下しで起きやすいミスは、

①その字に識別が必要であることに気づかない

②文法的に解こうとしてうまくいかない

これを防ぐためには、まず漢字の意味や文法事項から、考えられるパターンを洗い出し、次に文脈から解答を絞っていくことが効果的である。さて、まずは傍線部の文「犬何帰乎」そのものから見ていこう。この文自体はとてもシンプルなつくりで、「犬」が主語、「何」と文末の助字「乎」で疑問 or 反語 or 詠嘆、「帰」が動詞。これはぱっと見てわかるだろう。そして判別しなくてはならない壁は三枚ある。

壁1 疑問？ 反語？ 詠嘆？

「何」の字を見た瞬間に、「あーまた識別させるやつかよ……」となっただろう。疑問詞の含まれる文に傍線が引いてあったら、必ず疑問・反語・詠嘆

の識別をさせられると思おう。

壁2

「何」をなんと読む？

「何」という疑問詞はやっぱり、読み方がたくさんある。「なんぞ」で理由、「なにヲカ」で動作の対象物、「いづくニカ」で場所を尋ねる。

壁3

「帰」をなんと読む？

「帰」の読みは「かへル」だけではない。「きス」「とつグ」とも読む。「かへル」と読むときは、「もといた場所に戻る」という意味になり、「帰属する」(最終的に)「行きつく」という意味のときは「きス」と読む。「とつグ」と読んで女性が結婚することを表すこともある。さて、この文では「かへル」「きス」「とつグ」のどの読み方をするのだろうか。

これらについて、絶対になさそうなものは排除してしまおう。

まず、「帰」を「とつグ」と読むことはたぶんないだろう。主語は「犬」だし。また、「かへル」「きス」とも自動詞であることから、「何」を「なにヲカ」と読むことは考えにくい。したがって左のような表ができる。

いづくニカ		なんぞ		帰	疑問	反語	詠嘆
きス	かへル	きス	かへル				
犬はどこに行きつのか？	犬はどこに帰るのか？	どうして犬は行きついたのか？	犬は帰らない。	犬は帰るのだなあ。			
犬はどこにも行きつかない。	犬はどこにも帰らない。	犬は行きつかない。	犬は帰るのだなあ。				

さて次に文脈をみよう。場面は、銀を見張っていた犬を置いて川を渡ってしまった商人が、翌年、同じ地を訪ねたところである。商人は嘆いて「銀はもうないだろう。〇〇〇〇」と言い、探しに行くと、犬の皮が地面を覆っているのを見つけた。

セリフの前に「慨然」とあることから、セリフの内容は悲観的なものだと考えることもできる。「銀はもうないだろう。犬ももうないだろう」のように。だが、セリフのあとで証人は「往尋」している。「銀はもうないだろう」と言っていることから、探しているのは犬であるはずだ。つまり、商人は「銀はないだろうけれど犬はどこかにいるはず」と考えている、と推測できる。

このような文脈に合うものを前ページの表から探してみる。すると「いぬいづくにかきするや」と読んだとき、文脈的にぴったりくることがわかるだろう。セリフの最後であることも考慮し、末尾に「と」をつけるのを忘れずに。

問(三)

解答 船頭は乗客が満員になり追い風になったので、乗船するように何度も催促した。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

この口語訳の最大のポイントは「以」である。この字は多くの場合「もつて」と読み（「ひきずる」と読むこともあるが）、このとき返読文字になる。返読とは、下の語から上の語（＝返読文字）に戻って読むことをいう。

このとき問題となるのが、「返読文字がどの文字まで影響するか」という

ことである。

本文に即して説明しよう。傍線部（ア）の前半部分「舟子以人満風順」を見てみよう。舟子とは船頭のことである。問題はこれが「舟子以人満風順」か「舟子以人満風順」か「舟子以人満風順」か「舟子以人満風順」か……そのほかにももっとパターンはあるが、どれかがわからないということである。

さてヒントは実はもっと前にあった。本文2行目を見てほしい。「候人満（人の満つるを候ちて）」とある。ここから、傍線部（ア）の「人満」も「人満つ」とひとまとめに読むと考えられる。また、「風順」という字面もどこかで見たことがないだろうか……そう、四字熟語「順風満帆」である。これは、船が追い風を帆いっぱいを受け、すすいと進んでゆくさまから、ものが「順調に進むさまをいう。つまり、「順風」とは追い風のことである。

ここから、「舟子以人満風順」を「舟子／以人満／風順」と分けてみよう。また、傍線部（ア）の続きは「連催登舟」とある。「催」の字を「催促」と考えると、どうやら「登舟」＝船に乗ること、を促しているようだ。誰が？「舟子」が。さて、「人満」「風順」はどちらも船が出港するのに必要な条件である。つまりこれを並列と考えて、両方に「以」がかかると考えてみよう。すると、「舟子人満風順ふを以て」と書き下せる。このとき「以」は船に乗ることを促す（連催登舟）ための理由・条件を示す。

また、「連催登舟」は先ほど見たように「登舟」＝船に乗ることを「催促」している、と読める。「催ス」が動詞だとすると、催促したのは舟子なので、「連」は「催」を修飾していると考えられる。「連続」の「連」と考えれば、何度も催促した、というふうの意味も通る。したがって後半部分は「連ねて舟に登るを催す」となる。

問(四)

解答 商人は腹痛のため船を降り、ついできた犬に銀の見張りを言いつけた

が、急な出発に急いで自分だけ乗船した。(50字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

「忘銀与犬」：つまり、商人が銀と犬を置き去りにしてしまった経緯を50字以内で書こう。50字なので書ける内容はだいぶ絞られる。まずは、犬と銀を忘れるのに絶対に必要なことにはなにか考えよう。つまり、「これをしなければ忘れることはなかったのになあ」というものである(もちろん「商人が生まれてこなければよかった!」といった極端なものは除く)。

直近から攻めると、まず、急いで船に乗ったこと。落ち着いて乗れば忘れることもなかっただろう。さらに、犬に銀を見張らせなければ、商人の言いつけを守って銀の番をし続けることはなかっただろう。ついでに言えばそもそも船から降りなければよかった。どうして船から降りたんだっけ? 腹が痛かったからだ。どうして腹が痛かったのかは書かれていない。ここで終わり。

これを逆からたどってゆこう。腹が痛くて↓船を降り↓犬に銀を見張らせ↓急いで船に乗った。このように、原因を探り時系列順に並べれば、経緯は自然とできる。大切なのは、こうしてできた経緯に含まれる要素のすべてが「忘犬与銀」への原因となっており不可欠であるということである。あとはこれをまとめればちょうど50字程度になるだろう。

問(五)

解答 餓死したのちも主人の命令を守って銀を見張り続けた犬の話を読み、

人間よりも、忠義を尽くす犬をそばにおくべきだと思ったから。

(60字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 理由説明

解説

「旨哉言乎」というのは詠嘆形の構文。「A哉B也」で「Aだなあ、Bは」という感動を表す。倒置法が使われていることから感動の深さがうかがえる。「賢けんずる哉回也くわい」(賢いなあ、回(人名)は)という論語の文が有名。さて、今回「旨哉言乎」は「よいなあ、この言葉は」となるわけだが、問いは作者がこの感慨を抱いた理由を尋ねている。

まず、作者が「旨」と思った言葉は「寧ねい畜有義犬」である。まずこの意味を考えよう。なんと、送り仮名が省略されている……「ここで、「ははあ、問題作成者は、この文を正しく書き下せることを要求してきているのか」と気づいたら◎。文頭の「寧」の字について、可能性として考えられるのは、①「いづクンゾ」と読んで理由関連の疑問・反語を示すか、②「むしろ」と読んで「するほうがよい」という意味を示すか、どちらかであるだろう。つまり①「a」「寧んぞ義犬を畜有す」①「b」「寧んぞ義犬を畜有せん」②「寧ろ義犬を畜有す」のどれかになると考えられる。

①「a」については、格言的な言葉が疑問文であることがそもそも考えにくい。「いづくんぞ毎朝カレー食べざらん(＝毎朝カレーを食べる)」は格言になり得るかもしれないが、「いづくんぞ毎朝カレー食べず(＝どうして毎朝カレーを食べないの?)」は格言にならないだろう。

①「b」については、そもそも文脈と合わなくなってしまう。現代語訳すれば「義犬を飼ってはならない」となり、正反対の意味になる。

②だと、「義犬を飼うほうがよい」となり、これが正解。

ここで終わってはならない。選択形とは、二つ以上のものを比べて一つを選ぶ句形である。選択形を訳すときには、その選択肢にまで気を配る必要がある。さて、いったいなにと義犬を比べて「義犬を飼うほうがよい」と選択しているのだろうか……これは本文に答えが載っていないパターンである。ということは、誰でも予想できるようなものであるはず。そもそも「義」というのは簡単にいえば「人として正しい」ということである。ここでは、主人の命令を守り通すという、人として正しい道を、犬が守ったということが感動を生んでいる。したがって、比較されているのは「人」。

さて、問いは、作者がこの感慨に至った理由Ⅱ（人よりも）義犬をそばにおくほうがよい」と思った理由である。

作者は商人の飼い犬を「義犬」と認識している。つまり、犬の行動に「義」と認められるところがあり、「義犬を飼うほうがよい」と考えたのだから。

それでは犬の行動を整理してみよう。犬は商人に飼われている。商人が腹痛のため船を降りたときについていった。商人の言いつけどおりに銀を見張っていたが、船に乗り遅れてしまった。一年後、銀の上に犬の皮と骨があった。きつとずっと見張っており、餓死し、死んでもなお死体を銀の上に置いて隠し守ったのだから。

言いつけを守ったがために死に、死んでもなお守り続けた、という点が「義犬」とよぶにふさわしいエピソードだろう。あとはこれを60字でまとめればよい。

まとめ方のポイントだが、書かなくてはならないことは

- ①「旨哉言乎」という感慨を抱いた理由 ↑問題が聞いてきているのはここ
②「言」にあたる「寧畜有義犬」の訳 ↑ここは送り仮名が振られていない
ことからわかるように、問題作成者が理解してほしいがっているところ。

これらを落とさずに上手にまとめよう。

本文解説

第1部 犬と銀を置き忘れる商人（〜7行目「遂帰。」）

書き下し

妹の傭の董副使紹孔、昔西安太守に任ぜられしとき、余の為に言ふ。秦中に外に商ふ者有り。帰るに、一犬を撃へて以て行く。黄河に抵り、行囊船に在り、人の満つるを候ちて乃ち渡る。偶腹痛ければ瀉さんと欲し、亟やかに岸に上るに、犬随ひて往く。布袋の銀五十両を裏む有り。解きて地に置き、戯れて犬に向かひて曰く、「看ると好くせよ」と。少頃して、舟子人満ち風順ふを以て、連れて舟に登るを催す。帆已に満張たれば、一瞬にして開す。関中の黄河、水飢を建へすがごとく、対ひ渡ること二十里許にして方めて達す。商舟に入り、方めて銀と犬とを忘るるを悔ゆれども、然れども日暮れて再び渡ること能はず、明晨縦ひ往くも、安くんぞ前銀尚ほ在るを得んや。遂に帰る。

現代語訳

妹の夫の董紹孔副使が、昔西安の太守に任命されていたとき、私にこんな話をした。秦中に、外商を行う者がいた。（商売をしていた外国から）帰るときに、一匹の犬を連れて帰った。黄河に至り、荷物を船に乗せ、人がいっぱいになるのを待ってから船で渡るつもりだった。思いがけず腹が痛くなったので、用を足そうと思って、速やかに岸に上ると、犬がついてきた。商人は五十両の銀を包んだ布袋を携帯していた。下ろして地面に置き、ふざけて犬に向かって「よく見張っておいてくれよ」と言った。しばらくして、船頭が、人がいっぱいになり追い追風になったので、船に乗るよう何度も促した。

帆はずでにばんばんに張っていたので、(もやい綱をほどくと)一瞬で出発してしまった。関中の黄河は、瓶をひっくり返したかのように水の流れが速く、対岸に渡るのには二十里を要する。商人は船に乗ってからやっと銀と犬を置き忘れたことに気づき悔やんだが、しかしながら日が暮れてしまい再び河を渡ることはできなかった。たとえ翌朝行ったとしても、どうしてあの銀がまだあるはずがあるうか、いやな目に決まっている。そのまま(自国に)帰った。

第2部 銀を守り続けた犬 (7行目「越明年」)

書き下し

越えて明年、河を渡り復た前地を経るに、慨然として曰く、「銀已に存すること無からん、犬何くにか帰するや」と。往きて尋ぬるに、狗皮の地を覆ふを見る。之を検ふるに、白骨一堆のみ。商馬を憫れみ、地を掘りて其の骨を埋むるに、骨尽くれば則ち前銀尚ほ在り。蓋し犬銀を守りて離れず、餓死するを甘んじ、尸を銀上に覆ふのみ。商泣きてこれを瘞め、為に塚を立つ。諺に云ふ、「寧ろ義犬を畜有せよ」と。旨きかな言や。

現代語訳

年を越して翌年、同じ河を渡り再びあの地を通りかかったとき、嘆き悲しんで「銀はもうありはしないだろう、犬はどこに行ったのだろうか」と言った。行って探し求めると、犬の皮が地面を覆っているのを見つけた。これをよく調べると、白骨がひとかたまりになってあるだけだった。商人はこれがかわいそうに思い、地面を掘ってその骨を埋めようとして、骨を取り去るとあの銀がまだあった。思うに犬は銀を守って離れず、餓死してもなお、自らの死体で銀を覆って守ったのだ。商人は泣いて犬の死体を埋め、犬のために

土を盛って墓を建てた。ことわざ「寧ろ義犬を畜有せよ(人よりも忠犬をそばにおくほうがよい)」という。よい言葉だなあ。

要旨

秦の商人は犬に銀を見張るよう言い、そのあと急いで船に乗ったため対岸に犬と銀を置き忘れた。翌年、同じ場所に、犬の皮と骨が銀を覆うようにあった。「忠義な犬をそばにおきたいものだ」ということわざはもっともだ。

(101字)

(津田智沙、若杉柊志、松野貴大)